

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

2019年 11月 12日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 大学院地球環境学舎

職 名・学 年 博士後期課程 2年

氏 名 近藤 順子

助 成 の 種 類	2019年度 ・ 国際研究集会発表助成	
研 究 集 会 名	世界環境教育会議 The World Environmental Education Congress	
発 表 形 式	<input type="checkbox"/> 招 待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口 頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()	
発 表 題 目	Evaluation of fores environmental education field trip program for elementary school students in Japan	
開 催 場 所	BITEC(Bangkok International Trade & Exhibition Centre), バンコク(タイ)	
渡 航 期 間	2019年11月2日～8日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(発表用PPT資料, プログラム(申請者の発表セッション))	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	150,000円
	使用した助成金額	150,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助 成 金 の 使 途 内 訳	往復航空券:72,200円
		大会参加費:88,905円
(計161,105円のうち150,000円を上記助成金より充当)		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)	

成果の概要

大学院地球環境学舎 博士課程 2 年

近藤順子

1. 参加集会について

今回、京都大学教育研究振興財団の国際研究会発表助成を受け、タイのバンコクで開かれた世界環境教育会議 The World Environmental Education Congress に参加させていただいた。本会議は、環境教育の研究者および実践者の集う集会であり、2年に1度開催されている。今年度は、10回目、そして初のアジアでの開催ということで、欧米を中心に形成されてきた環境教育分野の発展および世界各地に根ざした展開を記念する大会として注目されてきた。基調講演では、阿部治氏（立教大学社会学部教授・ESD研究所所長）が登壇するなど、環境教育をESDの一分野と再定義し、持続可能な社会を目指すための教育的枠組として発展させ同分野を牽引してきた日本の研究者の先生方の功績や役割等も再確認できた。また、全日程を通して、研究発表のみならず各地域における実践者の取り組みに光が当てられていたことが印象的であり、本会議が構築を目指すアカデミアとローカルを包括する環境教育のネットワーク像というものを改めて経験的に知ることができた。

2. 自身の研究発表に関する成果

申請者は大会3日目、午前11時から12時まで行われたセッション（テーマ：環境教育における地域に根ざした教育アプローチ Place-Based Approaches to Environmental Education）において、「日本における小学生を対象とした森林環境学習のプログラム評価－ESDの視点からみた分析－」 Evaluation of forest environmental field trip program for elementary school students in Japan : An analysis from perspective of ESD を論題に発表を行った。

発表内容は、滋賀県における小学校4年生を対象とした森林環境学習プログラム「やまのこ」の参加者を対象としたプログラム事前・事後のアンケート結果の分析を元にした、プログラムを通して児童が地域の生態系および社会についてどのような認識を得たかについての検討である。当該プログラムにおいては生態学的知識のみならず地域社会の人々が森をいかに利用してきたかについて学ぶ機会が認められ、自然体験を伴う体験学習においてこれまであまり注目されてこなかった人文地理や歴史といった社会科との連携のさらなる可能性を示し、従来、主に理科との関連を中心に検討されてきた森林環境教育が、今後より学際的な視点を持ったプログラムとして発展する必要があることを指摘した。また、今回、滋賀県という、琵琶湖の流域（集水域）とほぼ重なる範囲を「地域」の定義として児童に問うたことで理解や関心の面で一定の成果が見られたことから、北米を中心に注目されてきた環境教育に関連した枠組みである地域に根ざした教育 Place-Based Education 研究における、流域 watershed という定義の教育効果の可能性についても提起した。

発表の反応として、質疑応答では、時間の関係上、1名から質問を受け「一回限りのプログラムの効果であることの課題と成果についてどのように考えるか」と問われたが、課題として、その後の認識の変化や行動の変化について追加調査を行う必要がありつつ、一度の校外学習においても児童の認識には統計上裏付けられた変化が見られたことから、期間や回数に限られる学校教育における環境学習において、校外学習といった機会を利用することによって一定の効果が期待できるゆえ、国内のみならず海外の事例にも汎用性のある有意義な提言につながるのではないかという返答を行なった。セッション終了後に引き続き質問者と議論を行いながら、当該プログラムの効果については、事前事後のアンケートだけでは結論づけることができず、教室においてどのような事後学習が行われているかについてのさらなる追加調査が必要であることなどを議論した。また、別のセッション参加者からも、今回のような調査結果を、今後、環境行動と教育効果についての議論に寄与しうるような論考につなげることが今後の投稿論文および学位論文執筆の際に必要なようになってくるのではないかと、といったアドバイスをいただくことができた。

3. 発表以外で得た成果

発表以外の成果としては、まず、最新の研究動向について知見を深めることができた。発表テーマとして多く挙げられていたのが、まさに現在多くの人々が直面している課題としての、気候変動の影響と災害に対する環境教育的アプローチの実践と方法論の検討である。高等教育機関やその他研究機関がイニシアティブをとり社会教育の場面でロールプレイやワークショップなどを通して人々の意識を高めるような取り組みが多数紹介されており、実践を支える理論についての議論が重ねられていた。一方で、学校教育における対応はまだ始まったばかりであり、事例等も少なく、開拓可能な分野であることもわかった。学校教育に関しては、環境保全行動に直接関わる、地域固有 *indigenous* な知を学校教育でいかに扱っていくかや、本来相反する国や広域レベルの学校教育カリキュラムがそれぞれの場 *place* でまさに起こっている環境の変化にどう対応していくべきかなどの議論も各トピックにおいて必ず討議されていたことも注目に値する。これらは、申請者の研究に直接関係してくるような議論であるため、様々な事例について知ることができたことは大変貴重な機会となった。

また、最終日エクスカージョンで訪れたタイにおけるコミュニティベースの環境保全の取り組みの視察も、東南アジアにおける先進的な事例として大変刺激的であり、今後の研究の着想の一つにつながっていくのではないかと考えている。